

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00170

研究課題名(和文) アンリ・ファンタン＝ラトゥール研究－芸術交流の視点から

研究課題名(英文) Studies on Henri Fantin-Latour, from the point of view of artistic exchanges

研究代表者

三浦 篤 (MIURA, ATSUSHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10212226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀後半のフランスの画家アンリ・ファンタン＝ラトゥールを、芸術交流の視点から再検討した。イギリスやドイツの美術家と交流し、文学者や音楽家とも接点があったファンタンの芸術は、異なる地域・文化を横断し、異なる芸術ジャンルを越境する特質を持つ。その国際的な交友関係を調査するとともに、特にイギリスと花の絵、ドイツと音楽という二つの側面に着目し、具体的な作品や書簡などの資料に基づいて分析することによって、地域間、ジャンル間を交差するファンタンの絵画のコスモポリタンな、そして比較芸術的な性格を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人文系の学問は細分化された分野に閉じこもる傾向にあり、美術史学もまたその例にもれない。本研究は、ファンタン＝ラトゥールという一人の画家を取り上げ、その交友関係や作品をイギリスやドイツとの地域間交流、音楽や文学との芸術間交流という広い視野から捉え直すことを目指している。このような国際的、学際的なアプローチによる研究成果は、これまで見過ごされてきた画家の特質を明らかにするとともに、現在の閉鎖的な学問状況、硬直した文化状況を解きほぐし、活性化することにつながるものと確信している。

研究成果の概要(英文)：Henri Fantin-Latour, French painter of the late 19th century, was revisited from the perspective of artistic exchange. The art of Fantin-Latour, which had exchanges with British and German artists and contacts with literary figures and musicians, has the characteristic of traversing different regions and cultures and crossing borders between different art genres. By investigating his international friendships and focusing on two aspects in particular, "his flower paintings and England", "his paintings and German music", and by analyzing specific works and documents (correspondence etc.), we were able to clarify the cosmopolitan and comparative artistic character of Fantin-Latour's paintings, which crossed over regions and genres.

研究分野：西洋近代美術史

キーワード：ファンタン＝ラトゥール 絵画と音楽

1. 研究開始当初の背景

マネと同世代の画家アンリ・ファンタン＝ラトゥールは芸術家集団肖像画家として知られているが、花の絵を中心とした静物画、音楽を主題とした作品の数も多い。前者はイギリスで人気を博し、後者はドイツとの関係が重要で、国際的、学際的な視点からのファンタン研究を考えた。

2. 研究の目的

ファンタン＝ラトゥールを芸術交流という角度から捉え直すことで、地域間、ジャンル間の芸術の交差を浮かび上がらせようとした。具体的には、芸術家像を得意とするファンタンの交友関係を洗い出し、特に「花の絵とイギリス」、「音楽と絵画」というテーマに焦点を当てることにした。

3. 研究の方法

作品と資料の徹底的な調査と分析を基本とし、海外の美術館、図書館での実地調査を計画していたが、感染症の流行で2019年のロンドン、グラスゴー、2022年のパリでの調査に限られた。しかし、国内での調査と収集した資料分析によって有意義な成果を得ることができた。

4. 研究成果

本研究はコロナ・ウィルス感染症流行の影響を受けて海外調査の規模を縮小し、国内調査、作品分析、文献、資料の読解に基づき、研究を進めることになったが、当該テーマに関してさまざまな研究成果を得ることができた。

①交友関係：ファンタン＝ラトゥールの芸術家集団肖像画（美術家、文学者、音楽家）に関して、19世紀当時のファンタン作品に関するサロン批評、ファンタン夫人編纂の作品目録、最近の展覧会カタログなどを参照して、研究の現状を再確認した。また、書簡を通してマネ、ホイッスラー、ルグロ、エドウィン・エドワーズ夫妻、オットー・ショルデラーなど親しい人物との交友関係が具体的に判明したのは、研究を進める上で重要な基盤となった。

特に親しい画家仲間であるマネとファンタン＝ラトゥールとの友情と共闘については、2021年3月に日仏美術学会で開催されたマネ・シンポジウムで発表を行った。1857年にルーヴル美術館で知り合った二人の画家はヴェネツィア派やベラスケスの絵を愛好する共通性を持ち、1860年代には革新的なリアリズム絵画で絵画界を揺るがしたマネと彼を囲むグループを擁護する集団肖像画（1864年、1865年、1870年）と単独の肖像画（1867年）を、ファンタンはサロン（官展）に発表した。その後、マネは印象派に近づくが、ファンタンは印象派を否定する立場をとり、両者の進む道には隔たりができたが、しかし友情が壊れることはなかった。

②「花の絵とイギリス」：ファンタン＝ラトゥールが描いた花の絵がイギリスで人気を博し、画家の生計維持にも寄与したことはよく知られている。その実態を検証するために、ロンドンでヴィクトリア・アンド・アルバート美術館所蔵のファンタンの静物画4点とテイト・ギャラリー所蔵の肖像画1点を調査した。前者の花の絵は、旧イオニデス・コレクションの《チューリップ、アザレア、バラ》とデッサン教室用の3点《サクランボ》《ユリの枝》《2つのヒナゲシ》で、後者は《エドウィン・エドワーズ夫妻の肖像》である。19世紀当時にサウス・ケンジントン美術館（ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の前身）が「デッサン教室用の3点」をエドワード夫人（ルース・エリザベス）から購入していることから、ファンタンとイギリスとの関係を証する具体例が静物画と肖像画を通して判明した。イオニデスのようにコレクターが趣味の対象としてファンタンの花の絵を購入することは当然あったが、美術教室の植物写生教材としてファンタンの花の絵が求められたことは、イギリスにおいてファンタンの花の絵が手本、モデルとして評価されていたことを示唆して興味深い。加えて、イギリスでファンタン作品の売却を仲介していたエドウィン・エドワーズ夫妻（エドウィンの死後は妻のルース）の存在も大きかったが、ファンタンとの関係は常に良好でなかったことが書簡から理解できる。

グラスゴーでは、グラスゴー大学図書館に所蔵されているファンタン＝ラトゥールのホイッスラー宛て書簡18通を閲覧した。自分自身やパリ美術界の近況を知らせる内容の書簡で、1860年代の前半から中葉にかけて二人の画家が手紙のやり取りを通して緊密な交友を保っていたことが理解できる。1863年の「落選者展」について詳しく知らせている書簡などは、ファンタンとホイッスラー、さらにはマネやルグロなども含め、ポスト・リアリズム世代の若い画家たちが共同戦線を張っていたことを示唆している。

この他、日本国内では国立西洋美術館が所蔵するファンタンの静物画《花と果物、ワイン容れのある静物》（1865年）も調査した。1860年代のファンタンの花の絵は比較的大きなサイズで、

複雑な構成を示すが、本作は典型的な作例と言える。さらに、アーティゾン美術館の新収蔵作品《静物（花、果実、ワイングラスとティーカップ）》（1865年）を実地調査した。1860年代の花を中核とする静物画の中でも、正面向きで左右対称という、かなりユニークな構図である。宗教的な寓意性、象徴性を見出せる可能性もあり、今後詳しく調査すべき貴重な作例と言える。また、ファンタンを花の画家として捉える点に関して、1870年代の作品に構図の点でジャポニズムの要素が見られることにも確信を抱いた。

③「音楽と絵画」：ファンタンと音楽のテーマについては、友人でドイツの画家オットー・ショルデラーとの書簡集（2011年）を通して、二人の親密な友人関係、両者ともに音楽好きという点、ファンタンのドイツ音楽への親炙（特にヴァーグナー）などを理解することができた。1871年からショルデラーがイギリスに移住することもまた、仏独英の三国をまたぐ二人の画家の軌跡として検討に値する。

ファンタン作品と音楽というテーマに関しては、とりわけ重要なヴァーグナー体験に焦点を当てた。まず、1861年の「タンホイザー」パリ公演に由来する、ファンタンのタンホイザー関連作（リトグラフと油彩）を研究し、禁欲的な芸術家像としてタンホイザーを造形したファンタンの特徴を見出した。さらに、1876年にパイロイトで観劇した「指輪」連作に関係する絵画・版画作品を洗い出し、調査を行った。《ラインの黄金》に関して、リトグラフ、パステル、油彩という制作順序になっているのはファンタンの特異性であり、この画家における版画の重要性が浮き彫りになった。

フランスの作曲家でファンタンが好んだベルリオーズについても同様の作業を行い、特にベルリオーズにオマージュを捧げた作品《記念日》（1876年）の寓意画としての特質を明らかにした。ヴァーグナー、ベルリオーズともに音楽評論家アドルフ・ジュリアンが伝記を刊行しているが、友人であるファンタンはそれらの著作にリトグラフのオリジナル作品を提供している。

なお、「タンホイザー」パリ公演に関する研究成果は、2022年11月から2023年2月まで開催され、研究者が監修を務めた「パリ・オペラ座展」（アーティゾン美術館）に織り込むことができた。ファンタンのタンホイザー像を、同主題を描いたルノワール作品におけるヴェヌスへの愛欲に溺れるタンホイザー像と比較することによって、同じヴァグネリアンであっても主題へのアプローチが異なることが判明した。そのことは同時に、印象派を否定したファンタン＝ラトゥールという画家が、19世紀前半のロマン主義から世紀末の象徴主義へと連なる芸術至上主義の系譜に位置することを意味しているのである。

以上のように、ファンタン＝ラトゥールの絵画をこれまで精査されていなかった比較芸術的な視点から再検討することによって、新たな発見や認識がもたらされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三浦篤	4. 巻 773
2. 論文標題 マティスと「東方」- ジャポニスム、マネ、オリエンタリズム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 270-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Miura	4. 巻 0
2. 論文標題 Relations diplomatiques franco-japonais et japonisme dans les annees 1860	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Oeuvres japonaises du Chateau de Fontainebleau - Art et diplomatie	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦篤	4. 巻 0
2. 論文標題 フランク・ミュラー - 輝くレトロモダン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『The flow of sweet time - Franck Muller 至福の時』展図録	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi MIURA	4. 巻 2020-1
2. 論文標題 Portee politique de la peinture moderne japonaise: de la peinture d'histoire de l'ancienne ecole superieure n° 1 a la peinture de bataille de Fujita Tsuguharu	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Perspective: actualite en histoire de l'art	6. 最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 三浦篤	4. 巻 20
2. 論文標題 メイヤー・シャピロとフランス前衛美術史の展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋美術研究	6. 最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi MIURA	4. 巻 0
2. 論文標題 The Triangle of Modern Japanese Yoga - Paris, Tokyo, East Asia -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 East Asian Art History in Transnational Context (Toshio Watanabe and Eriko Tomizawa-Kay (ed.))	6. 最初と最後の頁 65, 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 三浦篤	4. 巻 0
2. 論文標題 《フォーリー=ベルジェールのパー》をめぐる考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『コートールド美術館展 魅惑の印象派』図録	6. 最初と最後の頁 172, 180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 三浦篤
2. 発表標題 マネとファンタン=ラトゥール 友情と共闘
3. 学会等名 日仏美術学会シンポジウム「マネへのオマージュ：画家を取り巻く人々」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三浦篤
2. 発表標題 1878年の日仏美術交流
3. 学会等名 日仏美術学会創立40周年記念国際シンポジウム「フランス美術研究の現在と未来 日仏学術交流の進展を目指して」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三浦篤
2. 発表標題 パリ、東京、ソウル/台北/長春 -日本近代絵画とオリエンタリズム-
3. 学会等名 国際シンポジウム「AIと人文科学：国境を越えて・分野を越えて」(国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小池寿子、三浦篤	4. 発行年 2021年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 255
3. 書名 『NHK8K ルーヴル美術館 美の殿堂の500年』	

1. 著者名 三浦篤	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 560
3. 書名 移り棲む美術—ジャポニスム、コラン、日本近代洋画	

1. 著者名 小池寿子、三浦篤	4. 発行年 2021年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 255
3. 書名 NHK8K ルーヴル美術館 美の殿堂の500年	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>東京大学 三浦篤研究室 https://sites.google.com/site/miura1832/home 東京大学 比較文学比較文化研究室 http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/profs/profs.html</p>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------